

—継続に注目して①—

○高橋 陽子（お茶の水女子大学附属幼稚園） 岸井 慶子（鎌倉女子大学短期大学部）

I. はじめに

子どもたちが、自分のやりたいことに没頭し、試行錯誤を重ね、発見したり、友だちと関わりながらいろいろな感情を味わったり表現したりすることができるように、一保育者として直接的、間接的に支えながら一人ひとりの育ちを見守っている。全ての状況を理解して、関わることは困難である。その子どもの育ち、いつもの遊ぶ様子、仲間関係などを紡いで状況を捉え、子どもの向かいきたい気持ちに保育者の願いを込めて、ちょっと手伝う、支えるということを繰り返してきている。しかし実際には、遊びや幼児の気持ちなどの見取りにおいて、大きな「思い違い」の中で保育しているということはないだろうか。

今回は、4歳児の5月と6月の遊ぶ様子をビデオで撮影し、「ごっこ遊び」の始まりから、役決め、遊びから抜ける、遊びの転換など様々な場面を、ビデオという事実をそのまま映し出す手法によって、保育後に見る機会を得た。実際に保育中に捉えていた場面もあれば、「知らない」ことも映し出されていた。捉えていても、細かいところまでは「わからなかった」ことも多々あった。

保育者の思いや「思い違い」を振り返りつつ、この「ごっこ遊び」が継続していった過程を明らかにしていきたい。

II. ごっこ遊びの事例

<はじまり>一遊びが終わり、次にままごとを始めたA男とB男。そこにC男が入り、3人でままごとをしていると今度はD男が「入れて」と言って入ってきた。

<役決め>D男が「ぼくがおにいさんで、A男はおにいちゃんね」と言う。B男とC男は「おとうさん」宣言をする。しばらくすると、A男がD男に向かって「ぼくがおにいさんで、D男がおにいちゃん」と言う。やりとりを気づいたB男、C男が「背比べして、背の高い方がおにいさんで低い方がおにいちゃん」と言い出す。

<背比べ>A男とD男を並べて背比べさせようとするB男とC男だが、A男は横に並ぼうとしない。それどころか、遊具の流し台を支えにし、背伸びをしている。

<押し合い>D男は、背比べをしていないのに「低い」と決められ、「おにいちゃん」役を押し付けられそうになり、手を出す。反対にB男やC男に押されて、倒れこむこともあった。

<D男が抜ける>「やめた」と言って、コーナーから出ていこうとした時、B男「何人家族だっけ」C男「5人でしょ」の声。D男は「4人だよ。ぼく、やめたから」と宣言し、園庭に出ていった。

<ごちそう作り>ままごととコーナーにあるものを利用してごちそう作りをするA男とB男。C男は、反対の壁際に置いてある床上積み木を取りに行き、それを無造作に皿に乗せる。

<地震から救急ヘリコプター作り>C男が「地震です」と言うと、A男が「先生が、地震ごっこはダメって言ったよ」と制する。B男とC男は、ままごととコーナーを離れ、保育室中央にイスを置いて「救急ヘリコプター」を作る。

<傘作りのE男、イスを運んでくる>救急ヘリを作っているすぐそばで、E男が担任と一緒に傘作りをしている。イスが足りない、という状況を察知し、保育室の隅から一つ調達し、スツと置き、また傘作りに戻る。

<火事が起き、消火活動をする>B男、C男は、ままごととコーナーに戻ろうとするが、母親役の女兒を乗せて車を運転しているA男に「火事は向こうだよ」と言われ、そちらに向かう。消防士になりきって、火を消している。

III. まとめ（思い違いの観点も含めて）

3歳児後半ころまでは、何かになりきっている個々が、その気持ちを継続し、その場に居続けられるように、保育者は場を広げたり物を整理したりするような関わりをしている。事例で取り上げた4歳児前半、少しずつ友達存在やなりきっている自分を意識するようになってくると、様々な要因がごっこ遊びの継続に関係していくようになる。

○なかなか入れてもらえないD男の存在

保育者は、思い通りにしようとする気持ちが強いD男が入ることで、A男たちが3人の関係を脅かされるような気持ちを抱き、D男を外すような行動に出たのではないかと捉えた。しかし、D男が抜けてしまった時の残された子どもたちの表情を見ると、D男と一緒に遊んでいるメンバーとして意識されていた。D男の存在が遊びに変化をもたらし、いろいろな気持ちを出させていたと考えられる。

○ごちそう作りからみえるC男像

C男は、几帳面で正しいことを主張し、頼られる存在でもあり、考えて行動する力があると捉えていた。しかしお皿の上へのせた床上積み木は、大きすぎ、几帳面というより荒っぽさを感じた。そのようなC男の存在が、動きや会話を引き出していた。

○すっとイスを差し出したE男の存在

人付き合いがちょっと苦手で、手先も器用とはいえないE男。以前救急車ごっこで遊んだことがあったE男は、この日は傘作りを選択した。境界線に位置づき、いつでもA男たちの遊びにも入るよという態勢をとっていた。ついたてで囲っているが、いろいろな人が覗いていたままごとの場所も然り、境界線を出入りができるゆるやかさがストーリーを創りだしていた。

○何も知らない教師の存在～遊びを振り返って

背伸びしている背比べ、狭い場所での押し合い、D男が抜けた時の他の男児の存在等、ビデオを見て初めて知った。すぐそばにいたのに、気付かなかったことにも驚かされた。同時に、子どもたちが自分たちなりに気持ちを表現しようとしたり、新しいことを考えついたり、なんとか立て直そうとしたりしている姿も新鮮に見直すことができた。

もし保育者がここにいたとしたら、何をするだろう。子どもの動きに気付いたら何をするだろう。そして何をしないだろう。一人ひとりの子どもが考えてそこに居場所を確保し、ゆるやかな繋がりを感じつつ遊びに没頭できるように願い、とりあえず保育者もその場に身を置きたいと思う。